020340-000-7

特52-544

神の現在

武本　喜代蔵／著

M42

ABI-0146

現在の神國觀

武本喜代藏述

東京
警醒社書店

明治
42 6 17
内交

神の現在

廣島組合教會牧師
武本喜代藏述

㊀神は我等各人を離るゝこと遠からざる也。（使徒行傳十七章廿七節）

私は神の現在と云ふことに就て述たいと想ます。神の現在とは現に我が前に神樣が被入ることで、神は決して遠い天の涯にばかり住み玉ふでなく、我等に近く〳〵我が心の裏にさへ宿り玉ふと云ふのであります。無論神は天の上の天、地の下の地にも被入るに相違あり

ません。天地がどれほど廣くても神の在し給はぬ所てはないのです。けれども神は又我等に尤も近く在し、我等各人を離るゝこと遠からぬのであります。信仰のない人の眼には神程不確かと思はるゝものはありません。山でも川でも天地のあらゆる現象は手に觸れまた眼に看へるのですから確かだと感じられるのですけれども、神樣は眼に看へません、無論手にも觸れ玉ひません。そこで神はない、どうも眞面目に信ぜられないと言のでございます。斯ふ言ふ人々は物質の外何も信じないので、靈とか精神とか言ふものゝ在ることも疑ます。結局彼等は物の本體よりは其現象の方を確實とする人々で丁度衣裳を見て其人を見ないのと同樣であります。

されど靈眼一度開くれば遠いと思つた神は何物よりも近くなり、「我等は彼に賴て生また動また存ることを得る也」この眞理が解つて來ます。我等空氣を呼吸しながら空氣の在ることだに氣附かぬことがあります。それは空氣が遠いからではなく餘りに近いからです。私共は神の生命と其靈氣の中に活きて居ながらその神の在ることに心附かぬことがあります。けれども神がなくつては滿足が出來ぬ。それは人間の本性です。自然の要求です。そこで昔からあらゆる人々が高く之を天に求めまた、遠く地の涯、山の頂に探りました。神は在まさぬ乎、我等の神は何處にありやと。燈臺下暗し、彼等は神の程近く其周圍に否其心の中にさへ現在し給ふことを忘れて了つたの

であります。昔のイスラエル人はシナイ山で神の聲を聽き、エルサレムの神殿で其榮光を拜みました。けれども神は靈です、在さゞる所はありません。隨てシナイ山ばかりが聖き山ではなく、エルサレムばかりが聖き市ではありません。靈と眞を以て拜する者には何處の山、何處の巷も均しく神の聖地であります、神の聖殿であります。

不信仰の眼に不確と思はれた神も信仰の眼には何物よりも確實な存在者と看るのでございます。例令ば此に立派な家屋があります。其の形は西洋風で三階です。誰が見てもそれに相違はありません。所が今其家屋を壞して御覽なさい。瓦や石や柱はあるが、どこに其西洋風の三階建がありますか。今迄確かと思つた其家の形は實は尤不確かなものなのでありますか。瓦や石や柱も同樣です。之を壞したり、焚いたりすれば、最う煙や粉ばかりで瓦も柱もありません、其煙も消へて了ひます。粉も風に吹き去られて了へば最う何一つ無いちやありませんか。之れでも萬物の方が確かで、造物者なる神の方が不確でせうか。神は其見へざる物質と元素を造り之を案排し構成して進化てふ方則の下に凡てのものを導きて今日の狀態に至らしめたのであります。此神が何ぜ不確かでせうか。それを信ずることが何ぜ迷信でせうか。

神の實在を信ずることは人心の底に横はれる根本的觀念であります。動物にはそれがありません。幾ら進化しても猿の仲間に神殿が

建てられ、禮拜や説教が行はれようとは思はれません。所が人間はどんな未開人種の中にでも宗教があります。極昔の穴居時代でも既に早や一種の神が祭られて居ました。勿論理屈や形式は全然でお話しになりませんが、兎に角、何か實在する人間の依頼すべきものがあると云ふ觀念だけは何れの人、何れの時代にも存在して居たのでありません。そこで第一に起る問題は我々は何故神を信ずるかと云ふ事ではなくして、何故神を疑ふかと云ふことです。人間の根本思想に成つて居る神を信ずるのに何も理由は要りませんが、それを疑ふには理由がなくてはなりません。

神が近く在す事に就て何より適切な例は、心と體との關係です。

此の二つのものは別なやうで實は一つ、一つであつて而も又別であります。心が一寸起きようとすれば足は最う起きて居ます。取らうと思へば最う手は前に出て居る。耻しいと心に想ふ間もなく、直ちに血脈に大變動を起して顏は眞つ赤に成つて居ると云ふ風で、其迅速なことは間髪を容れずであります。ツマリ心は主で體は從です。心が先づ動いて體の運動が之れに從ふのであります。神と天地との關係も又之れと同樣でありますまいか。

「神光あれと云ひ給ひければ光ありき」と云ふ樣な譯で、天地の活動は直ちに神の力の發動であります。神力が一度動きますれば此天地は自由に運轉するのであります。則天地は神の形體ですから、其

心靈なる神の決心一つで如何樣にも運轉する理です。大は宇宙の構造より小は一木一草の榮枯盛衰まで神の力、神の意を離れて成るものはありません。キリストが難病を癒し玉ふたのも神の力の發動です。精神が物質を動し、信仰が肉體を支配すると云ふことは疑はれません。キリストの衷に現はれた神の力は發して奇跡と成り、異能と成つたので何も特更に態さらしく行はれたものではありません。

神は我等に近く在し又た何物よりも確實であることは上來述べた通りですが、キリストは更に此神の本性が愛だと敎へ玉ひました。之れは神に對する我々の觀念を一層明かに、一層活潑にしたものであります。何と云ふに愛は本來活動的です。他の幸福と安全の爲めに動くのが愛の特性であります。自分は愛はあるが他人の爲めに働きはせぬと云ふ程自家撞着な話はありません。若し果して神が愛であれば空然として宇宙の奥に眠り玉ふことは出來ません。神は受造物特に人間の救の爲めに働き玉ふ筈です。愛の神は本性として石地藏のやうに人間の不幸に對して無頓着で冷淡で居り玉ふことが出來ないのです。そこで神の自現神の化身と云ふやうなことが起つて來ました。愛は人間の救の爲めに『神人と成て我儕の衷に寄れり』てふ一大事實を引起す動機でした。而して神は自然に現はれ、歷史に現はれ、又世界の人類に現はれ玉ひましたが、特にナザレのイエスの衷に尤も完全に尤も圓滿に自現し玉ふたのであります。

(一)自然、信仰の眼を放つて見れば天地は神の榮光を現はし燦爛と輝いて居る。神の力、美、秩序、無限などの本性が到る所に現はれて居る。一枝の花を了解すれば神が分ると詩人が歌ふたやうに、實際自然界は野にも山にも神の聖德が現れて居ます。心なき牛は野の花を踏んで何とも想ひません。無風流な草刈男は野原一面に咲いて居る黃金色の花を刈り取つて平氣ですが、植物學者や花を愛する人々が其所を通りかゝれば、どうしても看過しにすることが出來ません。花を解し其美に撲たれるからです、ツマリ花を通して神に觸れるからであります。

天文學者でも、航海者でも、解剖分析何れの學科に熱衷する人でも、人智の限りを盡して、辿りゝて將に其無限際に入らんとするや、一種畏敬の念に打たれて地に祈ると云ふことですが、誠に神の絶大と無限とに感じ又人間の小弱愚昧なるを悟りたる者は感極つて泣くのが當然であります。

(二)歷史、人間の長い歷史に現はれた入り組んだことや、世界の國々の治亂興亡の跡にありゝと神が見へます。人間を支配し玉ふ其隱れた御手がほの見ゆるのであります。善の勝利、不義の滅亡、冥目して考がふれば一の戰爭、一の國家の變動にも神の攝理の顯然と現はれて居ない所はありません。眼先ばかり考ふればこそ神も道理もないようですが、中々さうでありません。神は確かに在ります。

道理が何よりの力です。善が直ちに榮えず、不義が即坐に罰せられないと云つて、それで決して神の支配を疑ふ譯には行きませぬ。神に於ては千年も一日の如く、一日も千年の如くです。歴史は凡ての空論を壓して神の攝理の疑ふべからざることを証明して居ます。

(三)人間、神は又人間の中に自らを現はし玉ひます。人間程神に似たものはありません。勿論墮落した者の兇惡の相だけ見れば神の子どころか全然で惡魔の化身とも云ふべきですが、併し又人間本來の相、則義に勇み、愛に泣く優しい心深い思想や自由に決し自由に行動することなど考へて見れば、人間はどうしても萬物の首、何物よりも神に酷似て居る者であることが分ります。私共は自然界に於て神の力や美を見ました。歴史に於て其支配の跡を窺ひました。けれども神の道德性が尤も能く現はれた所は人間の良心のみであります。良心は實に神の聲です、儼として私共に命令します。自分の良心だからどうでも成りさうなもので實はさうなりません。自分の者でありながら自分以上に立つて命令する者であります。六ヶ敷云へば我等の中には命令者と被命令者とが居るのです。即ち汝爲すべし爲すべからずと命ずる我と、或は之に從はんとし或は之に逆はんとする他の我とが居るのであります。人間不斷の戰ひは此二つの我の不和衝突から來るので、聖人とは畢竟下等の我を殺して高等の我(良心又は神)に從ふもの、凡人とは下等の動物的我に屈從して高等な

る神的我を度外視するものに外ならぬのであります。

(四)基督、人間は神の子であります。仍ち神の性德の尤も能く現はれたものは人間であります。けれどもそは理想の人間、現實の彼は神を距ること千萬里、兎ても話にも比較にも成つたものでありません。剛情な無慈悲な而も淫慾の奴隷なる實際の彼は惡の化身です。罪の形體を成して現はれたものです。私共はこんな人間に出逢ふ毎に、ゾッとして之れでも神の子かと驚き怪むばかりであります。

併しながら眼を擧て神の子イエスを御覽なさい。何處に私慾私心がありますか。何處に汚れた所がありますか。ア、其愛、其聖德、旭輝く富士の高峯乎、千古の雪を戴くアルプスの絶頂乎。言語同斷、

形容の仕方がありません。神はキリストに依りて世に現はれ、キリストを通して全く御自身を我等に與へ給ふたのです。「神の充足る德は悉く形體をなしてキリストに在り」誠に彼を見るは神を見るのです。彼に接するは直ちに神に接するのであります。キリストを離れて神は解りません。キリストなくば世は全然で暗みです。去ればこそ彼は「我は世の光なり」と被仰ました。古より凡の詩人も宗教家は神を求めました。釋迦も孔子も暗中を摸索りて頻りに煩悶しましたけれども、とうゝ神に達し得なかつたのです。人類あつて以來何處にイエスの如く神を意識し神を實現したものがありますか。彼は神を呼吸したのです。神の中に生き又動いて居たのです。彼は全く

神に充ち神に醉ふたのです。

生老病死は釋迦をして厭世家と成らしめたけれども、キリストは其中に神を見ました。あらゆる人世の榮華と快樂を盡した釋迦は悲觀に陷り、凡そ人間の受くべき萬種の不幸悲慘の生涯を送つたイエスは却つて不幸の中に神の愛を感じ悲慘の間に神の力の現在を信じて樂天しました。之れはキリストの人生觀と釋迦の人生觀の著しく異なる點であります。イエスは罪の世を嘆きました、惡き世の滅亡を感じましたけれども、毫も世を棄て世を厭ふ考へはなく、涙の裏にも感謝し失敗の中にも勝利を歌ひ、野の百合花空の鳥にも神の現在の疑ふべからざるを悟つて喜んだのであります。

イエスを見イエスを信ずる我等は最早や神の現在が疑はれなくなりました。其品位の氣高く其威嚴の飽く迄稜々として而も溫良鳩の如く、渾身血、渾身涙、愛の爲に我を忘れ、神と同化し、理想を實現して毫も遺憾なき生涯こそ神彼と共なりし何よりの證據ではありませんか。自然を見又た歷史を見ても未だイエスの人格を見ざる者には神の德性は分りません。イエスを信じイエスに近いて初めて神が分ります。神の現在も、我等にいと近き事も、其本性が愛で、我等を救はんとて活動し玉ふことも、自ら解つて來るのであります。

キリストに觸れキリストに感化されて我等は自分の中に神を發見します。改心は神の現在の何よりの證據です。我等の心が疑惑や罪

惡の泥に沈んで居る間はそれは丁度頑石のやうなもので死骸同然です。自分では善の爲めに動きたい義の爲めに働きたいと思ふのですがどうも動けませぬ。利己的の考への方が強くて愛は冷却して了つて居ます。が併しながらイエスに接して其の強い熱烈な感化に觸れました時には、最う何時の間にか己と云ふものが消へて了つて、神のみが我等の中に働き玉ひます。愛の火は燃へて來る、悔改めの涙は瀧の如く流れだす。それぱかりではありません。多年不孝の兒が兩親の前に手を衝て御詫します。不忠の僕も又其主人の前に是迄の不義と不忠誠を懺悔します。剛情な心も碎けて了ひ、無慈悲は僞なき愛と化し、淫慾、獸慾の奴隷たりしものは、今や主の血に潔めら

れて神の子、天の世嗣と變つて來ます。ア、之れが果して人間業でせうか。自分の決心他人の勸誘のみの結果でせうか斷じてさうではありません。神の現在、神靈の感動、上よりの恩化を信ぜずしてはどうしても此等の不思議を說明することは出來ません。

神は時々敎會の中にリバイバルを起し玉ます。羅馬敎會の腐敗するや、神はルーテル及びヅーヰングリーの徒を起して宗敎改革てふ一大リバイバルを起し玉ました。「ピユリタン」や、ジヨン、ウエスレイの活動、近くはウエールス、印度、メルボルン等に於ける大復興の如き、何れも神が我等の間に在して、信仰を起し、敎會の眠を破り玉ふ一手段であります。自分は彼の一派の人々の故意とらしい人

爲的方法や、叩りに人を強ひて罪を告白せしめんとする不都合な、似非リバイバルを排斥するけれども、以上の如き深い尊い靈的醒覺を見ては神の現在し給ふことを疑ふことが出來ませぬ。

ブース大將が横濱の波止場で、一寸支那留學生某に言をかけた時彼は感極つて覺へず泣き出したと云ではありませんか。あんな神々しい人の祈を聽けば千萬遍有神論の講義を聽くに優つて神の現在が分ります。神は議論の中に住み玉ひません。活きた信仰ある人格に宿り玉ふのであります。

或判事が無學な一傳道師の祈に感じて悔改めたと云ふ話を聞くにどうしても神の力靈の働きを疑がふことが出來ません。判事は先づ種々の難問を出して其傳道師を苦めようとしました。所が傳道師は平氣です。質問も議論も柳に風と受け流して「お祈りなさい、神は理屈では解りません」と云つた。而して更に言を續いで「こゝ四日間滞在する中にあなたを信者にします」と云つたそうであります。此言に判事は怒を含んで歸つて了ました。餘りに人を馬鹿にすると思つたからでせう。翌日も其翌日も彼は訊ねて來て聖書を繙き、祈をし、判事にも祈るべく勸めました。最初は種々反對したけれども、果ては何物にか觸るゝ如く感じ、批評的態度漸く一變して「我未だ信仰起らず願くは我に信を與へ玉へ」と祈たつそうであります。三日目には傳道師の一言一句肺腑を貫き、三十分を經ざるに信仰を得

て初めて確信の祈を捧げ、四日目には「此夜余は絶大無限の愉快を感じ、神に對すること父母の如くなれり」と告白して遂に斷然受洗したと云ふ事であります。議論では如何することも出來なかつた此人を、かく迄も變化し、改心せしめたのは何でせうか。此は神の現在、聖靈の働きを信ずることなくしては到底解釋すべからざる一種の奇跡であります。

我等は前も後も右も左も絶大の力に取圍まれて居ます。何の恐れ何の憂がありませう乎。神の現在を信じ自今永遠迄も神と共に居り、神と共に働き、又た神と共に住むべく信じた以上、世界は全然で別物となります。惡念邪情は消え、薄志弱行は療され、果ては死さへ亡くなります。「英靈千古に生く」とは強ち形容のみではありません。主曰く「凡て生きて我を信ずるものは何時迄も死ぬることなし」と神と同化し絶對と抱合すれば世は此儘にて天國です。神の現在を強く深く感ずることが靈的生涯の入口で又新生涯の首途であります。

神の現在 終

明治四十二年六月十日印刷
明治四十二年六月十四日發行

著者　武本喜代藏

發行者　東京市京橋區尾張町二丁目十五番地　福永文之助

印刷者　横濱市太田町五丁目八十七番地　村岡平吉

發行所　東京市京橋區尾張町二丁目十五番地　警醒社書店　電話新橋一五八七　振替貯金口座壹壹番

印刷所　横濱市山下町八十一番地　福音印刷合資會社

不許複製

259
360

武本喜代藏先生著

新生涯

定價三十五錢
郵税四錢

是れ著者が涙の痕也苦戰の歴史なり婉麗なる詩的文字と深遠なる靈的實驗よりして新生涯の如何に樂く尊きかを說く議論あり咏懷あり時に痛論縱横し時に故山の風色を懷ふに泣き神を求め基督を趁ふて苦悶苦鬪の末遂に希望の曙光を仰ぎ新生涯の山河歴々たる光景を眺めて歡喜せる狀宛然一個のパノラマに似たり今や煩悶の時代は去つて人皆確信を求め新生涯を熱望せる時此好著を見る蓋し時勢に適せるものか新生涯を慕ふ人々は請ふ一讀の榮を賜らんことを

武本喜代藏先生著

現世と未來

定價二十錢
郵税四錢

（基督敎叢書の一）

目次　旅人○人生と修行○天上生活○現世主義等謹んで江湖の精讀を促かず

北京大学图书馆藏